Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-07-06

子どもの貧困における保育の役割と課題：2000年以降の海外文献レビューをもとに

中谷，奈津子

(Citation)
神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要,16(2):127-137

(Issue Date)
2023-03-31

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/0100481776

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100481776

KOBE UNIVERSITY

神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要
第 16 巻第 2 号　2023

研究報告

子どもの貧困における保育の役割と課題：2000 年以降の海外文献レビューをもとに

Literature Review since 2000 on the Role and Challenges of Early Childhood Education and Care with regard to Child Poverty

中谷　奈津子*
Natsuko NAKATANI*

要約：本研究は、我が国で子どもの貧困が着目されるようになった 2000 年代以降の海外文献のレビューを通して，我が国における貧困に対する保育の役割や支援の可能性と課題について手がかりを得ることを目的とした。「貧困」および就学前の「保育」をテーマに含む文献を ERIC から抽出し、最終的には 36 研究を選定した。それらを内容の類似性に基づき整理したところ、貧困の子どもに対する保育の有効性，保育の形態や構造による違い，特定の認知スキルや教科への着目，保育者（教師）の姿勢・支援，仲間関係，保護者の園への関与などに区分され、それらに関する知見が蓄積されていることがわかった。我が国における保育の可能性と課題については、子どもの貧困による格差縮小を企図し、(1) 多様な経験を保障する質の高い保育を展開すること、(2) 専門性の高い保育者集団を形成し、量的確保に努めること、(3) 子どもの保育への参加を確実にすること、(4) 保護者への関わりと地域における支援ネットワークへの参入を促すことが、今後求められる重要な課題となるものと考察された。

キーワード：子どもの貧困，就学前の保育，海外文献

1．はじめに

2000 年代に入り，我が国では子どもの貧困が社会問題として浮上するようになった[1)]。子どもの相対的貧困率は 1990 年代半ばから上昇傾向にあり，2009 年には 15.7%，2012 年には 16.3%と，おおよそ 6 人に 1 人の子どもが貧困の状態にあった（厚生労働省 2019）。OECD 加盟国においても，我が国は 34 か国中 10 番目に子どもの相対的貧困率が高く，平均を上回っていると報告された（内閣府 2014）。その後，子どもの貧困率は 2018 年に 13.5%（OECD 旧基準。新基準では 14.0%）と低下したものの，現在も OECD の平均を上回る状態が続いている（OECD 2021）。2020 年春からの新型コロナ感染症やロシアによるウクライナ侵攻，それに付随する世界情勢の大変動などにより，我が国でも格差が拡大し，生活困窮家庭の増加も見込まれている（厚生労働省 2022）。

2014 年には深刻化する貧困状況を鑑み，子どもの貧困対策を総合的に推進することを目的として，「子どもの貧困対策の推進に関する法律」が施行された。基本理念には「子ども等に対する教育の支援，生活の支援，就労の支援，経済的支援等の施策を，子どもの将来がその生まれ育った環境によって左右されることのない社会を実現することを旨として講ずること」（第 2 条）が掲げられ，「子供の貧困対策に関する大綱」では，教育の支援のひとつに，幼児教育・保育の無償化の推進及び質の向上が打ち出されるようになった（内閣府 2019）。

子どもの貧困は子ども期のみならず，子どもの将来にまでつきまとうものである。というのも，貧困は，親とすごす時間を剥奪し，子どもの学力格差を拡大させ，社会的な孤立を促進させる可能性を持つ。また，虐待やネグレクト，非行，健康格差，乏しい生活経験，強い疎外感などとも関連し，それらは世代間で連鎖する可能性があるという（阿部 2008：2-28）。そのため特に就学前の保育[2)]は，貧困から受けるネガティブな影響をできるだけ早期に緩衝するための重要な社会資源と位置づけられる。

一方，我が国における貧困と保育に関する報告

＊　神戸大学大学院人間発達環境学研究科准教授

（2022 年 9 月 30 日　受付
2022 年 12 月 27 日　受理）

や研究は緒に就いたばかりである。たとえば小西（2016）は，長崎市内の保育所調査に基づきながら，保育所の可能性として，子どもの多様な活動や経験の保障，保護者の社会的孤立の軽減などをあげている。また平松（2016）は，自らの保育実践から，他機関との連携の促進，家庭生活のゆとりの生成，安心感と信頼感に基づく子どもの生きる力の育成などの可能性を提示した。さらに中村（2015）は，名古屋市の保育所調査から，貧困を抱える保護者が不適切な養育態度を有する傾向にあることを明らかにしている。前者２つの報告は事例に基づく示唆に富む貴重なものではあるが，実証的であるとは言いがたく，中村の調査もまた１つの自治体に限定されたものであり，研究知見の蓄積という観点からすればさらなる展開が必要となる。我が国において子どもの貧困に関する議論が活発になされている昨今にあって，保育が果たす役割再考のための研究や報告は乏しいといわざるを得ない。

世界各国で子どもの貧困率が上昇していることは，既にOECDによって指摘されているところであるが，同時に早い時期からの教育介入が低所得家庭の子どもの発達と好成績獲得への過程に大きく貢献するという報告もなされている（OECD = 2011）。特に，Heckmanによるペリー就学前プロジェクトやアベセダリアンプロジェクトでの追跡調査の報告は，早期保育の重要性と可能性を析出するものであった（Heckmman=2015：29-35）。さらに以下に示すように，諸外国では，これ以外にも早期介入に関する研究が多く蓄積される現状にある。

ではそれらの実証研究は，具体的にどのような知見を得ているのか。本論での関心事に引きつけて考えるならば，就学前の保育は，子どもの貧困に対してどのような強みを持ち，どのような役割を果たすことができるのか。諸外国の保育の場においては，我が国でいうところの，いわゆる「子育て支援」に相当する機能に着目した研究はなされているのか。

以上のような観点から，本論では，我が国で子どもの貧困が着目されるようになった2000年代以降の海外文献をレビューすることを通して，我が国における貧困に対する保育の役割や支援の可能性と課題について手がかりを得ることを目的とする。

２．研究方法

本研究の対象研究は，1）英語で書かれている論文，2）テーマに貧困と保育に関する用語が含まれている研究，3）ピアレビューを経て学術雑誌に掲載された研究，4）インタビュー調査やアンケート調査などの実証研究，5）貧困における保育の役割に関して示唆的である研究を対象とした。

対象研究の選定は，三つの段階を踏んだ。最初に，ERICを用いて貧困と保育をキーワードにした関連研究を検索した（最終アクセス：2022年８月６日）。就学前の保育に関する論文は，教育学の研究を中心に広がっていると予想されたため，教育分野における文献情報を多く収録した検索エンジンERICを使用した。キーワードは多様な用語が想定されるため，貧困はpoverty/ low-income/ low socioeconomic/ disadvantaged，保育はpreschool/ kindergarten/ early childhood education/ nursery school/ early years setting/ day careで検索した。

次に，各研究のテーマと抄録を使い明らかに就学前の施設保育に関連しない研究，総説，レビュー論文を除外した。最後に，入手した研究を精読し対象研究を選定した（図１）。

３．結果

ERICから142研究が検索され，スクリーニングの結果，最終的には36研究を採用した。それらを内容の類似性から区分し，原著者及び年代，国，目的，対象者，結果などのデータを抽出し整理した。内容は，貧困の子どもに対する保育の有効性10（以下，数字は研究数），保育の形態や構造による違い6，特定の認知スキルや教科への着目8，保育者（教師）[3]の姿勢・支援6，仲間関係1，保護者の園への関与4，その他１などに区分された（表１）。国別にみるとアメリカが27と最も多く，次いでカナダ3，ヨーロッパ（ベルギー，オランダ，フランス）3，オセアニア（オーストリア，ニュージーランド）2，南アジア（インド）１という結果となった。

（１）貧困の子どもに対する保育の有効性

すべての子どもを含めた保育全般の効果というよりも，貧困や低所得層の子どもを対象にした調査から，それら不利益な状況にある子どもたちに対する保育の有効性が検証されていた。アメリカの研究が多いものの，カナダやベルギー，インドなどの研究も報告されている。全体的には就学前の保育は，貧困の子どもの発達を促進させ（Rao 2010；Burchinal, Vandergrift & Pianta et al. 2010；Astuto & Jennifer 2017；Yen & Lee 2019），特に言語能力の向上に寄与することが示されている（Crosby, Dowsett & GennetianBenzies et al. 2010；Tough & Edwards et al. 2011；Johnson, Finch & Phillips 2019；Thomas, Colin, & Leybaert 2020）。就学後も継続した効果を示す追跡研究もみられている（Pearman 2020；Mughal, Ginn & Perry et al. 2016）。

Burchinalらの研究は，保育の質を検討する上で示唆に富む（Burchinal, Vandergrift & Pianta et al. 2010）。彼らは，公的資金による多大な投資への問題関心から，就学準備を効果的に行うためにプレ

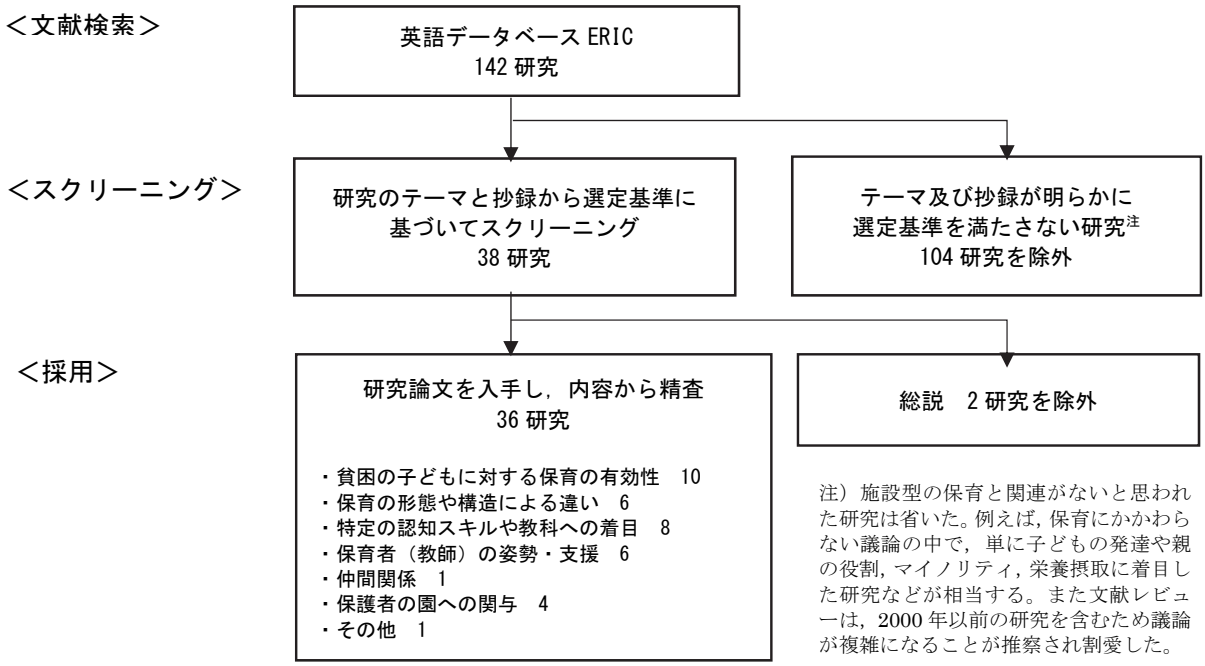

図１　研究の選定プロセス

キンダーガーデンに在籍する低所得家庭の子どもを対象とした就学前プログラムを評価し，保育の質と子どもの発達との関連における「閾値」を探究しようと試みた。子どもへの効果は，質の高い教室でさらに強く予測されること，質がある下限漸近レベルを下回ると子どもの発達が促進されないことが示唆された。つまり貧困を抱える生活経験の乏しい子どもたちとっては，その発達を保障する上で，単なる「預かりの場」としての保育ではなく，より質の高い保育での経験が求められていることが明示された。

（２）保育の形態や構造による違い

保育の形態や構造が，貧困層の子どもの発達に影響するという研究もみられた（Fuligni，Howes & Huang et al. 2012；Bierman, Heinrichs　& Welsh et al. 2017）。アメリカの全日制幼稚園と半日制幼稚園に通う貧困層の５歳児の発達を検証した Schroeder（2007）によれば，全日制幼稚園に通う貧困層の園児は，半日制の子どもよりも英語や数学で高い得点を獲得しているという。全日制幼稚園での保育によって得られた得点は，貧困の影響によって失われた得点にほぼ匹敵するとして，学力格差を縮小させる可能性を示唆している。

また，アメリカではヘッドスタートによる恩恵を受けられない子どもたちは，州が資金を提供するプレスクールやコミュニティベースの保育を利用することが多い。Winsler らは，それらの保育を利用した場合，４歳時点でどのような発達がみられるかを大規模なサンプルから検証した。コミュニティベースの保育に通う子どもたちは，入園時には言語，認知，巧緻性などで有意なリスクを抱えていることが多いものの，その後顕著な発達を遂げ，年度末には全国平均とほぼ同じレベルまで到達すると報告された。子どもたちの発達はどのタイプの保育でも目覚ましいものの，特に低所得の子どもにおいては，言語面や認知面に関して充実したカリキュラムを有する公立のプレスクールの方が，多くの利益を得る可能性があると指摘されている（Winsler, Tran & Henry et al. 2008）。公立のプレスクールの有効性を示唆する研究は他にもみられている（Ansari, Lopez & Michael et al. 2017）。

一方，オランダでは de Haan らが，不利益な状況の対象児を多く集めたターゲット型介入（対象教室）と，そうした子どもの割合が少ないユニバーサル型介入（混合学級）のどちらが子どもの発達に寄与するかを念頭に，子どもの発達を比較した。その結果，混合教室の対象児たちの方が，読み書きや算数で多くの得点を獲得することが明らかにされた。不利益な状況にある子どもは，社会経済的にも民族文化的にも豊かな仲間との交流を通して，優れた表現力や語彙に触れる機会を有し，その恩恵を得られるのではないかと考察されている（de Haan, Elbers & Hoofs et al. 2013）。

（３）特定の認知スキルや教科への着目

言語能力，数的能力，芸術教育など，特定の認知スキルや教科に着目した研究もみられた。

①言語能力

言語能力については，他の区分の研究でも多く扱われているが，ここでは保育における保育者による会話の質分析（Chen & de Groot Kim 2014），言

表1　各研究の概要

研究／国	目的	主な対象者	結果
貧困の子どもに対する保育の有効性			
Rao（2010） インド	南インドの貧しい農村家庭におけるプリスクールの質が発達に及ぼす影響の検討	識字率 66.3%の隣接する 2 つの村の 67 名の 4 歳児	園の質（プロセスの質）が高いほど，全体的な発達（知覚，記憶，言語，計算能力）が良好となる。資源が乏しい環境でも，子どもたちに話しかけ，質問するだけで，子どもの発達に効果がある。
Burchinal et al.（2010） アメリカ	公立幼稚園就園前プログラムの評価から，保育の質と子どもの成果との関連に閾値があるかどうか検証。	米国 11 州の 671 のプレキンダーガーデンに在籍する低所得家庭の子ども 1,129 人	保育者-子ども間の相互作用の質が高いほど，子どもの社会的スキルのレベルが高く，問題行動のレベルが低いこと，保育者が中程度から良質の指導を行った場合，子どもの言語能力，読解力，数学能力が向上した。質がある下限レベルを下回ると子どもの発達は改善されないことが示唆された。
Crosby et al.（2010） アメリカ	低所得層の子どもにおける就学前の保育の種類とその後の外在化問題行動との関係	低所得者を対象とした研究をもとに 3〜4 歳の子どもを 3,290 人抽出	IV 法では，母親と保育者の双方から，就学前に施設型の保育を受けた子どもは，施設型の保育を経験したことのない子どもよりも，その後の外面化問題が少なかったことが示された。
Benzies et al.（2011） カナダ	アボリジニの血を引く低所得の子どもの受容性言語能力に対する，二世代にわたるプリスクール･プログラムの効果の検討	アボリジニの血を引く 45 人の子どもとその保護者	保護者と子どもそれぞれに対するプリスクールでのプログラムは，子どもの受容性言語の得点に正の効果。養育者への効果は限定的であった。
Mughal et al.（2016） カナダ	二世代にわたるプリスクール･プログラムの子どもの受容性言語に与える効果は，10 歳まで持続するかの検討。	プログラム開始から縦断研究に参加する子ども 134 人と保護者 79 人	二世代にわたるプリスクール・プログラムの効果は，子どもの受容性言語得点に対して，10 歳まで持続した。これらの得点は，養育者の婚姻状況，教育レベル等とは関連がなかった。
Astuto et al.（2017） アメリカ	貧困家庭で育つ子どもたちの幼稚園での実行機能と中学 2 年生の課外活動の関連の検討	ECLS-K 研究の全国 944 の幼稚園に在籍した 21,255 人の子ども	幼児期の実行機能は，8 年生における演劇や音楽クラブへの参加，スポーツ，課外活動に費やした時間数の有意な予測因子であった。
Yen et al.（2019） アメリカ	ジャンプスタート･プログラム（独自の幼児教育補助プログラム）が低所得の就学前児童の就学準備に与える影響の検討	カリフォルニア州 3 歳〜5 歳の未就学児童 121 名	ジャンプスタートは，子どもの言語能力，読み書き能力，自発性，社会性の発達に大きな効果を及ぼした。
Johnson et al.（2019） アメリカ	気難しい気質（difficult temperaments）を持つ低所得層の子どもたちにとって，就学前プログラム参加による恩恵が異なるかを検討	ECLS-B から抽出した低所得層の全国代表サンプル（N=3,000）	気難しい気質の子どもでは，家庭保育よりも学校ベースのプリスクールにおいて読解力が向上した。家庭保育よりもヘッドスタートでの取り組みがよく，学校ベースのプリスクールよりも外面化行動の問題が少なかった。
Pearman（2020） アメリカ	子どもの居住地域の貧困レベルによって，プリスクールへの入園･在園が小学 3 年生の学力に及ぼす影響が異なるか検討	テネシー州におけるプレキンダーガーテンプログラムからの無作為抽出（N=1,076）	VPK(Voluntary PreK Program)は，高貧困地域に住む子どもたちの 3 年生での読解力を高めたが，低貧困地域に住む子どもたちにはマイナス効果であった。算数の測定可能な効果はなかった。
Thomas（2020） ベルギー	社会経済的地位が低く，言語的に少数派である子どもを含む幼稚園のクラスでの対話型読書介入の効果の検証	ブリュッセル市内 8 つのプリスクールの子ども 185 人（57-68 か月児）	10 週間の読書介入により，言語（語彙と形態統語）と萌芽的リテラシー（活字認知，文字知識，音韻認知）を向上させることができた。
保育の形態や構造による違い			
Schroeder（2007） アメリカ	米国の全日制と半日制の幼稚園に通う 5 歳児の州標準テストの成績の比較	コホート研究に参加した 4,411 人の 5 歳児	全日制幼稚園に通う貧困層の園児は，半日制に通う園児に比べて，英語/言語学および数学で高い得点を獲得した。
Winsler at al.(2008) アメリカ	就学前プログラムによって，民族的･言語的に多様な低所得層の子どもたちの就学準備への効果は異なるかの検討	保育園の補助金受給児童（n=1478），無料公立学校プリスクールの児童（n=1611），有料公立学校プリスクールの児童（n=749）	プリスクールの年始めと終わりに認知，言語，微細運動発達を評価。これらプログラムに参加した子どもは，ほとんどの分野において就学準備がかなり進んでいたが，公立学校のプレ K に参加した子どもは，認知と言語の発達にやや大きな伸びを示した。
Fulign et al.（2012） アメリカ	公立プリスクール，私立プリスクール，家庭的保育施設の 3，4 歳の低所得層の子どもたちの経験する活動設定と毎日のルーティンを把握し，就学準備スキルとの関連の検討	カリフォルニア州低所得層の子どもを対象とした 125 の教室と無作為抽出された 3〜4 歳の在籍児 206 名	家庭的保育施設と私立プリスクールは，公立プリスクールよりも，自由選択型日課を展開する傾向があった。教師主導と子ども主導の活動がほぼ同じ割合の教室では，子どもの語彙の得点が高かった。
de Haan et al（2013） オランダ	社会経済的に不利な就学前児童の読み書きおよび算数の能力に関する混合教育の効果の検証，特別教育プログラムの使用，保育者による実際の指導活動の影響の評価	国の教育優先政策で特別支援を受けるオランダ西部中規模都市の園に通う子ども 91 人	不利な状況にある子どもは，対象児のみで編成された教室よりも，その他の子どもとの混合教室において，読み書きと算数のスキルが向上した。特別教育プログラムの使用による効果はなかったが，保育者による教育プログラムの意図を盛り込んだ指導は，不利な状況にある子どもの成果と関連していた。
Bierman et al.（2017） アメリカ	REDI（就学前介入プログラム）参加者の縦断的な追跡により，教室と家庭訪問の充実が，子どもたちの 3 年後（小学 2 年次）に持続的な影響を及ぼすかの検討	ペンシルバニア州のヘッドスタートセンターから募集された 556 人の子ども	通常のヘッドスタートと比較して，REDI による教室での介入は 2 年次の授業への参加，園児と保育者の関係，社会的能力，仲間との関係を向上させた。家庭訪問による介入は，子どもの精神的健康および認知的スキルにおいてさらなる利益をもたらした。
Ansari et al.（2017） アメリカ	低所得のラテン系の児童の公的資金による就学前プログラムへの参加と 3 年生の学業成果との関連性を検討	4 歳時に補助金によるセンター型保育または公立学校のプレ K を経験した低所得ラテン系児童 11,902 人	公立学校のプレ K を経験した子どもは，センター型保育に通っていた子どもよりも，3 年生の数学と読解で高い得点を獲得した。センター型保育よりも公立学校のプレ K の方が効果的である。
特定の認知スキルや教科への着目			
①言語能力			
Chen et al.（2014） アメリカ	ヘッドスタートの 2 つの教室で就学前教室の保育者と 3，4 歳児との会話の質を応答的言語戦略の観点から分析	米国北東部の 2 つのヘッドスタートセンター保育者 2 名とその園児 27 名	保育者はサークルタイムで「子ども中心の戦略」と「相互作用促進の戦略」を多く適用したが，認知的に難しい会話に子どもたちを巻き込む言語モデリング戦略をほとんど用いていなかった。
Bichay-Awadalla et at.（2020） アメリカ	ヘッドスタートに参加した就学前児童を対象として，言語能力と問題行動との縦断的，双方向的な関係の検討	米国南西部のヘッドスタートの未就学児 194 名	ヘッドスタート年度の秋と春に評価。内面化行動と表出性言語能力の間に双方向の関係が，早期の受容性言語が後の内面化行動の問題を予測する一方向の関係があることが示された。
Davis et al.（2020） アメリカ	ヘッドスタートに参加した就学前児童を対象として，言語能力と問題行動との関係，および社会的スキルがこれらの関係を媒介するかを検討	米国南西部ヘッドスタート 41 教室に在籍する 3〜4 歳児 242 名	子どもの初期の受容性言語は，後の内面化行動と外面化行動を予測する。社会的スキルは，言語スキルと親または保育者が報告する子どもの問題行動との関連を媒介しないことが示された。

研究／国	目的	主な対象者	結果
②数的能力			
Pagani et al.（2006）カナダ	低所得家庭の就学前児童において，算数の前段階のスキルを予防的に充実させることが，数の知識に影響を与えるか検証	モントリオール最貧困地域に住む 4 歳児 532 人	あるプログラムは，子どもの数的知識には影響を与えなかったが，別の算数プログラムでは効果が見られ，子どもの言語的背景の影響も確認された。
Georges（2009）アメリカ	個人や教室での指導と貧困が数学の得点にどのように関係するか，指導と数学テストの得点の関係が，園児の貧困によって緩和されるか検討	ECLS-K 研究の全国代表サンプルから，公立，私立幼稚園の 13,054 人の園児を抽出	ワークシートを使った活動，子どもの分析・推論能力を高める活動，共同グループでの活動が，数学の得点と関連した。高貧困層の園児においては，分析・推論活動がテスト得点を向上させた。
Wilson et al.（2009）フランス	社会経済的状況の低い幼稚園児における，数の感覚を向上させるゲーム（ナンバーレース）の有効性の検討	社会経済的困難に直面する地域の幼稚園に通う 4～6 歳の園児 53 名	ナンバーレースは，記号的数値比較課題において，社会経済状況の低い幼稚園児の成績を大いに改善した。
Janisse et al.（2018）アメリカ	ヘッドスタートの教室における毎日のコンピュータ利用が未就学児の認知発達に与える影響について検討	アフリカ系アメリカ人の低所得者層の子ども 208 人（平均 48.8 か月）	調査開始時，6，12，18 カ月目に評価。コンピュータ群の子どもたちは，対照群の子どもたちに比べて，数量的発達において有意に大きな伸びを示した。
③芸術教育の導入			
Brown et al.（2013）アメリカ	就学前プログラムにおける充実した芸術活動の取り入れが低所得層の子どもの情緒機能に与える影響の検討	ペンシルバニア州のヘッドスタートの園に通園している子ども 205 名とその保護者	芸術活動を充実させたプログラムでは，従来の就学前クラスや芸術活動を十分に取り入れていない園と比較して，興味，幸福，誇り等の子どものポジティブな感情が多く観察された。
保育者（保育者）の姿勢・支援			
Lee et al.（2007）アメリカ	就学前教育の保育者の教育的信念と園児の社会経済的地位との関連，保育者の教育的信念は教科（読み書き，算数）により異なるか検討	公立園で社会経済的地位の低い 4 歳児を担当する保育者と，私立園で社会経済的地位の高い 4 歳児を担当する保育者 60 名	社会経済的地位の低い層の保育者は，幼稚園への準備として読み書きと数学に重点を置き，コンピュータの使用を支持する傾向があり，園児の学習準備，特に読み書き能力の未発達を懸念している。社会経済的地位が中位の層の保育者は，個々の子どもやその好みを尊重した教育を支持していた。
Dominguez et al.（2011）アメリカ	子どもの状況特有の問題行動と教室プロセスの質が子どもの学習アプローチに及ぼす付加的・相互的影響の検討	米国南東部の都市部の無作為抽出された 36 のヘッドスタートの園に通う 275 人の子ども（平均 53.2 か月）	保育者の情緒的支援の少なさ，保育者の指導的支援は子どもの学習アプローチに負の影響を及ぼした。仲間や保育者間の問題行動は，学習困難の重要な予測因子となった。保育者の情緒的支援は問題行動を減少させ子どもに学習スキルを身につけさせる。
Smith（2012）アメリカ	学校でのふるまいの指導には，明確な階級差がある。低所得層の子どもたちが学校でのふるまいの方法を潜在的に学んでいる可能性を検討	シカゴの 2 つの特徴的なヘッドスタートセンター（観察調査）	子どもの主体性を認め暗黙の教授法を用いる教室では，ほとんどの子どもが教室のルールを内面化し，必要なときには他の子どもたちと一緒に問題を解決する子とも見られた。たとえ家庭の文化と相反するものであっても，自ら考え行動する規範を教えることは可能である。
Lee et al.（2015）アメリカ	教室環境における 2 側面（子どもと保育者の関係の親密さ，教室の情緒的支援）の子どもの発達への影響を検討	ペンシルベニア州のヘッドスタート教室から抽出された 4 歳児 164 名	子どもと保育者の関係の親密さと教室での情緒的支援は，1 年次の子どもの攻撃性，学習意欲と関連した。子どもと保育者の関係の親密さは，1 年次の社会性，読み書き能力と関連した。
Sabol et al.（2018）アメリカ	就学前の教室の質および子どものもともとのスキルを制御した上で，保育者，仲間，課題への取り組みが就学準備と関連しているかを検討	米国の中規模都市にある 49 の就学前教室で，主に低所得で人種・民族的に多様な 4 歳児 211 名	保育者との積極的な関わりは子どもの読み書き能力の向上に，仲間との関わりは言語能力と自己調整能力の向上に，課題への取り組みは保育者との関係の緊密化に関連することが示された。否定的な関わりは，それらの能力を低いものにしていた。
Qi et al.（2020）アメリカ	低所得家庭の就学前児童の言語能力と問題行動との関係，および教室の情緒的支援が果たす緩衝的役割の検討	米国南西部の中規模都市にあるヘッドスタートセンター41 教室から抽出された子ども 242 名（平均 43.49 か月）	子どもの言語能力が高いほど問題行動は少なく，言語能力と問題行動との関係は教室の情緒的支援によって変化することがわかった。特に言語能力の低い子どもは，保育者による情緒的支援のレベルが低い教室で，より高いレベルの問題行動を示していた。
仲間関係			
Bulotsky-Shearer et al.（2012）アメリカ	低所得層の子どもの問題行動と学習成果の間に，仲間遊びのコンピテンシーが媒介するかどうかを検討	米国北東部の大規模な学区のヘッドスタート 46 教室から抽出された子ども 507 名（平均 53.8 か月）	内面化および外面化の問題行動と学習成果の関連は，相互作用的な仲間との遊びのスキルの影響によって説明された。就学前の早い時期に困難であっても意欲的な行動をとることで，仲間と適切に関わることができ，その結果，読み書きや算数のスキルの習得に影響を及ぼしていることがわかった。
保護者の園への関与			
Cooper（2010）アメリカ	家庭の貧困とプリスクールとの親の関わりは，どのような要因によって規定されるか検討。	ECLS-K から抽出された 1,280 校における 19,375 人の子ども（平均 5.7 歳）と保護者	プリスクールとの関わりは，低所得層，貧困層で弱い。親の教育レベルが高い方がプリスクールとの関わりが強くなる。入園前からの保護者の働きかけや入園後の働きかけがあると，保護者のプリスクールとの関わりを強める。
Grace et al.（2014）オーストラリア	就学前の保育サービスに参加する際の障壁と促進要因に関する保護者の意見の聴取	3 歳から 5 歳の子どもを持つ，農村，郊外，都市部の貧困地域にある 101 の家庭	家庭では，コストよりも保育の質を重視しており，家庭が保育を安全だと感じている場合，家族内外のつながりが強い場合，他の専門家（社会福祉など）と関わっている場合に，保育サービスへの登録が行われる可能性が高い。
Mitchell et al.（2017）ニュージーランド	保育利用優先度の高い家庭が保育を利用する際の障壁は何か，保育利用を促進するための取り組みは，どのようにその障壁を減らし，家庭や地域のニーズに応えているか検討	EPF計画，TAP資金に参加する55の事業提供者と99の家庭（インタビューは，23事業提供者，27家庭）	保育サービスの費用，利用可能性，文化的妥当性が優先家庭の参加を阻む障壁となることがわかった。両計画とも，保育サービスが関わることで，家庭の保育理解を深め，家庭を保健・住宅・社会機関と結びつけ，家庭が直面する複雑な社会問題の解決に寄与していた。
Susman et al.（2018）アメリカ	低所得者層における就学前教育の出席に関する保護者の障壁と解決策の検討	大都市で半日プログラムを行うプリスクール 18 教室から抽出された保護者 111 名	保護者は，幼児教育とプリスクールを高く評価していたが，病気，養育問題，交通機関，家庭生活などの理由で欠席していた。プリスクールや家庭の属性，人種・民族によって出席率に差が見られ，近隣の保護者とのつながりが薄いため，子どもの出席に助けを求めることが難しい状況であった。
その他			
Fantuzzo et al.（2007）アメリカ	都市部の低所得の就学前児童を対象として，保育者が評価する学習へのアプローチと情緒・行動適応の構成要素間の高次の関係性の検討	米国北東部の大規模な学区のヘッドスタートに登録された児童 1,764 名（平均 59 か月）	高次の因子として「統制された行動」と「学業不適応行動」が抽出された。統制された行動の高い児童は，攻撃的な行動が少なく，保育者や仲間との共同学習への注意や継続性が高い。学業不適応行動の高い児童は，教室での児童の参加を妨げたり，内向的であったりした。

語発達と問題行動との関連に関する研究（Bichay-Awadalla, Qi, & Bulotsky-Shearer 2020；Davis & Qi 2020）が区分されている。

Chen らは，ヘッドスタートの２つの教室で保育者と 3, 4 歳児の会話の質を分析した。保育者はサークルタイムで「子ども中心の戦略」「相互作用促進の戦略」を多く適応していることが確認されたが，言葉による相互作用は，やがて非言語的で一方的なものになりやすく，子どもの言語習得を積極的に援助しているようにはみえないという課題が導き出された。この結果は，認知的に難しい子どもたちを会話に巻き込むためのスキル習得に向けた養成教育や現職教育の必要性を示唆している（Chen & de Groot Kim 2014）。

また，言語発達と保育における問題行動には関連があるという研究もある。Bichay-Awadalla らは，ヘッドスタートの教室に通う未就学児の受容性言語と表出性言語，及び問題行動を把握し，その関連を検討した。その結果，極度の内気や不安，ひきこもりなどの内面化行動と表出性言語の間には双方向に関連があることが示された。言葉を用いた他者への発信が乏しい子どもは，周囲の子どもたちとの肯定的なやりとり，要求や感情の伝え合いが困難となり，その結果，内面化行動が促進されるものと考察された。また内面化行動の多い子どもは，不安や抑制が強く，仲間や保育者とかかわることが難しいため，低い表出性言語スキルに留まってしまうものと思われた。さらに，早期の受容性言語が後の内面化行動を予測することも指摘され，言語発達と問題行動を視野に入れた園生活での早期介入の必要性が確認された（Bichay-Awadalla, Qi & Bulotsky-Shearer 2020）。一方で，子どもの社会的スキルは，言語能力と子どもの問題行動との関連を媒介しないという指摘もあり（Davis & Qi 2020），それぞれ独立したスキルとして扱う必要も示されている。

②数的能力

数的能力に関する研究では，数に関するプログラムや活動，ゲームなどの実施によって，子どもの数量的な発達はどのように変化するかという研究が多くみられた（Pagani, Jalbert & Girard 2006；Georges 2009；Wilson, Dehaene & Dubois et ai. 2009；Janisse, Li & Bhavnagri et al. 2018）。すべての数的な取り組みに効果がみられるわけではないが（Pagani, Jalbert & Girard 2006），数に関するプログラムのほとんどは，その効果を報告している。特に Georges は，貧困が得点に及ぼす悪影響の大きさを指摘しつつ，分析・推論活動が，低貧困層の得点には影響しないにもかかわらず，高貧困層には有意に機能することを明らかにした。貧困層の子どもにとって，問題解決や推論のスキルを頻繁に強調する教室にいることの有益性が指摘された（Georges 2009）。数的理解の環境については，Wilson らの研究も示唆に富む。彼らは自ら開発したコンピューターゲームを活用し，貧困を抱える子どもたちの数覚への影響について検証した。当初成績の低かった子どもたちに対してゲームは特に効果的であったと報告されるが，貧困層の成績の低さは，実際には「数覚へのアクセス」の乏しさや，点の集まりといった非記号的表現と数字などの記号的表現とを結びつけることの難しさに起因しているかもしれないと考察されている（Wilson, Dehaene & Dubois et ai. 2009）。

③芸術教育の導入

芸術教育に関する研究は１本であった。Brown & Sax（2013）は，芸術活動を充実させたプログラムにおいては，従来の就学前クラスや芸術活動を十分に取り入れていない園と比較して，子どもに興味，幸福，誇りなどの肯定的な感情が多く観察されることを確認している。困難を抱える子どもたちにポジティブな感情を誘発することが重要であるとし，芸術活動の有効性を提唱している。

（４）保育者（教師）の姿勢・支援

保育者（教師）の姿勢・支援では，貧困層とそれ以外では，保育者の指導法が異なっていることが示された（Lee & Ginsburg 2007；Smith 2012）。Lee らによれば，社会経済的地位の低い層の保育者は，家庭養育環境の貧しさや子どもの学習準備，能力の未発達への懸念から，読み書きや数学に重点を置いた指導を支持する傾向があるとされ，ミドルクラスの保育者は，カリキュラムを個々の子どものペースに適合させることや社会性の発達を促進させることをより重視していることが示された（Lee & Ginsburg 2007）。

また 2010 年以降には，保育者による情緒的支援の重要性が示唆されるようになった（Dominguez, Vitiello & Fuccillo et al 2011；Lee & Bierman 2015；Sabol, Bohlmann & Downer 2018；Qi, Zieher & Lee et al. 2020）。Dominguez らは，ヘッドスタートの園に通う 4，5 歳児を対象に調査し，保育者の情緒的支援は子どもの問題行動を減少させ，学習スキルを身につけさせる一方で，情緒的支援の少なさや指導的支援は子どもの学習アプローチに負の影響を及ぼすことを見いだしている（Dominguez, Vitiello & Fuccillo et al 2011）。Lee らも，幼稚園における子どもと保育者の親密さや教室での情緒的支援は，小学校１年次の学習意欲や攻撃性と関連し，幼稚園での子どもと保育者の親密さが，読み書きや社会性と関連することを明らかにしている（Lee & Bierman 2015）。さらに Qi らは，貧困層の子どもの言語能

力とプレスクールでの問題行動の相関を確認した上で，教室での情緒的支援がそれに対する緩衝的な役割を果たすことを指摘した（Qi, Zieher & Lee et al. 2020）。これらの知見からは，保育者による貧困層の子どもとの丁寧な関係構築や個別対応の重要性に加え，教室全体に支援的な雰囲気が保たれるような意図的な働きかけやクラス運営が肝要であることがうかがえる。

（5）仲間関係

Bulotsky-Shearer らは，低所得層の子どもの問題行動と学習成果の間に仲間関係のコンピテンシーが媒介するかどうかを，ヘッドスタート教室から抽出されたデータをもとに検討した。問題行動と学習成果の関連には，相互作用的な仲間関係のスキルが媒介していることがわかった。就学前の早い時期に，困難であっても意欲的な行動をとることで仲間と適切に関わることができ，その結果，仲間とのやりとりが読み書きや算数のスキルの習得に影響していくものと思われた（Bulotsky-Shearer, Bell & Romero et al. 2012）。また仲間との関わりは，言語能力や自己調整能力の向上に寄与するとの報告もみられている（Sabol, Bohlmann & Downer 2018）。

（6）保護者の園への関与

質の高い保育に参加することで，保護者は育児負担から一時的に解放され，子どもにとっても健やかな発達が見込まれる。しかし保護者と園との関わりは，貧困層や低所得層で弱いとされており（Cooper 2010），子どもの欠席の可能性が高いと指摘されている。欠席の理由としては，病気，養育問題，交通機関，家庭生活などがあげられるが，近隣の保護者とのつながりが希薄で，子どもの登園に対する協力を依頼できないという背景も示されている（Susman-Stillman, Englund & Storm 2018）。オーストラリアやニュージーランドでは保育サービス利用の優先家庭であるにもかかわらず保育サービスに登録しない家庭が多いという問題関心から，保護者の保育サービス参加を促す方策を検討した研究もある。例えば，保育サービス利用に関する行政からの補助金を活用できる場合には，保育料などの費用はサービス参加への障壁にならないが，費用を負担すべき場合には，たとえわずかな額であってもそれが参加の障壁になり得るという。また保護者が保育を安全と感じている場合や保護者自身が家族内外の豊かなネットワークに支えられている場合，社会福祉など他機関とつながっている場合などに，保育サービスへの参加の可能性が高まるという。また園が保護者とかかわることによって，家庭を保険・住宅・福祉などの専門機関と結びつけることができ，家庭が抱える複雑な問題の解決に寄与するとの報告もみられている（Grace, Bowes & Elcombe 2014；Mitchell & Meagher-Lundberg 2017）。

4．考察

海外文献レビューから得られた知見をもとに，我が国における貧困に対する保育の役割や支援の可能性について考察していく。

（1）多様な経験を保障する質の高い保育の展開

OECD 諸国では，平均して 7 人に 1 人の子どもが貧困の中で暮らしており，栄養不足や不安定な住居など，物質的な剥奪のリスクが高まっており，さらに，家庭で聞く言葉が少ないことが指摘されている（OECD 2021）。我が国においても，貧困を含む生活困難家庭では，保護者自身が生活の不安定さを抱え，整理・整頓，持ち物の管理などの身辺処理も十分ではなく，暴言･暴力が頻発する など，日常的な子どものケアが難しい状態が散見されることが指摘された。その中で生活する子どもは，欠席しがち，空腹，不潔，生活リズムの乱れ，身辺自立の遅れなど，基本的生活習慣に課題が見られ，情緒が不安定であったり，人との関わりが困難であったりなどの様子がみられ，園では「特別な配慮を必要とする子どもの姿」として捉えられているという（中谷・木曽・吉田ら 2022）。

こうした状況に対し，これまでの報告や本論での整理においても，就学前の保育が貧困層の子どもたちの発達を言語，数的理解，情緒，社会的スキルなど多様な側面から底上げし，親の所得による発達格差を縮小させる可能性が期待される。我が国においては，幼稚園や保育所等において「幼児期の終わりまでに育ってほしい 10 の姿」が共有されているが，それらを踏まえ，季節行事や自然体験，文化資本へのアクセスなど，余裕のない家庭では触れにくい経験や文化的環境をより考慮に入れて保育を展開していく必要性も考えられる。また，学習成果には仲間との関係性が影響するという知見もみられたが（Bulotsky-Shearer, Bell & Romero et al. 2012），保育実践の場においても，支援を要する子どもたちの排除や孤立を予防し，よりよい仲間関係を構築できるような保育者の積極的な姿勢や援助を検討する視点もさらに重要なものとなる。

（2）専門性の高い保育者集団の形成と量的確保

今回の整理の中で，貧困層の子どもに対する保育者の姿勢や支援，子どもとの関係性が，子どもの問題行動を抑制し，学習意欲やスキルを高め，社会性の発達を促進させることが示唆された。一方で，そうした子どもたちは，時に激しい攻撃性の発露や意欲の減退など，個別対応の必要性をうかがわせることも指摘される（鶴 2021）。貧困層の子どもたちのよりよい発達を志向するなら，普段から子どもと保育者間の支援的な関係性を醸成しておくこと，

要配慮の状況に直面した際にも，特定の保育者や子どもの背景を理解した保育者による丁寧な個別対応ができるよう体制整備をしておくことが望まれる。そのためには保育者自身の専門性を高めると同時に，困難を抱える子どもの様子を関係する保育者間で共有し，園全体の体制構築や職場風土の醸成に努め，そもそも対応可能な保育者の数を十分に確保しておくことなどが求められよう。

（3）子どもの保育への参加（登園）を確実にする

不利益な状況に置かれる子どもは，その権利があっても保育に参加する機会を奪われる可能性が高いことが指摘された。同時に貧困を抱える家庭では，養育困難な背景を複合的に抱えることも指摘された。貧困と子どもの登園をめぐる状況は，我が国においてもそれほど変わらないものと思われる。

特に貧困層の子どもにとって，保育はよりよい発達を保障する意味合いが強く，その後の人生の格差縮小につながるものとされる。とするなら，日々の登園が困難な家庭に対し，何らかの手立てを講じながら，子どもの保育への参加を確実なものにしていくことが子どもの発達権を保障する上でも必須条件となるのではないだろうか。就学前の保育の有効性が大いに強調されたとしても，そこに参加できない状況があり，そこに社会がアプローチしないのであれば，不参加の子どもは保育の恩恵を享受することはできない。子どもの送迎を園が直接的に担うことが難しい場合もあろうが，子どもが毎日安心して登園できるよう，他の資源を活用した手立てを含め保護者と調整し，子どもの保育への参加を確実にすることが必須である。

（4）保護者への関わりと支援ネットワーク

今回の整理では，保護者に対する支援そのものから切り込んだ研究は少なく，その効果も限定的であった（Benzies, Tough & Suzanne et al. 2011）。しかし，入園前や入園後の親への働きかけがあると，園への関与が高まること（Cooper 2010），保護者が保育を安全だと感じる際に保育サービスへの登録が促されることなどから（Grace, Bowes & Elcombe 2014），園が保護者と積極的に関わり，子どもにとっての保育の意義を伝えていくによって，結果として子どもの保育への参加を後押しするという効果が見込まれるものと思われる。

また社会福祉などの専門家とつながっていることが，保育サービスの利用を促進し，一方で保育サービスを利用していることが，家庭に困難が生じた際の関係機関への橋渡しにつながっていた。こうした双方向のサービス利用の往還は，地域の支援ネットワークの重要な資源として保育サービスが位置づけられること，保護者がいずれかの支援ネットワークに参入してしまえば，その後の相互往還も容易になることを意味している。保護者の生活基盤の安定のために支援し，地域の支援ネットワークに参入させるという観点からも，保育の役割は大きいといえよう。

5．本研究の限界

本研究の限界は，データベースが一つであり，抽出された研究に偏りがある可能性は拭えない。また2000年以前の研究を含め，貧困と関連する多様な要因を含めた研究を網羅することで，就学前の保育が有する可能性をより深く検討できたのではないかと思われる。さらに今回の文献は3歳以上の子どもの保育が大半を占めた。我が国では，0歳から長時間保育を利用する家庭も多くみられる。貧困層の子どもにとってみれば，それにはどのような利点や課題を有するのか，今後検討する必要がある。

注

1）筆者が「子ども」「貧困」をキーワードに，Ciniiで図書検索を行ったところ，我が国の状況を記した図書は，2000年代後半以降に多く出版されている（20220921検索）。その1冊として，明石書店から出版された『子どもの貧困』（2008）の共編者である松本は，「子どもの貧困について社会的関心を高め議論を提起することを目的」として本書を出版したと明記している。

2）本論では，保育を「施設で行われる就学前の教育・保育」と位置づける。我が国の保育形態に照らし合わせるなら，幼稚園，保育所，認定こども園，地域型保育を含むものとなる。また「保育」という用語のみでは文脈上混乱が生じると予想される場合には，適宜説明を付加している。なお，家庭で行われる保育を示す場合には「家庭保育」と表記した。

3）原文では“teacher”と表記されているものを，本論では小学校以降の教師と区別するために「保育者」と訳している。同様の理由から“student”は「園児」とした。

文献

阿部彩（2008）『子どもの貧困』岩波新書.

Ansari, A., Lopez, M., Manfra, L., et al. (2017) Differential Third-Grade Outcomes Associated with Attending Publicly Funded Preschool Programs for Low-Income Latino Children. Child Development, 88(5). 1743-57.

Astuto, J., Ruck, M. (2017) Growing up in Poverty and Civic Engagement: The Role of Kindergarten

Executive Function and Play Predicting Participation in 8th Grade Extracurricular Activities. Applied Developmental Science, 21(4). 301-19.

Benzies, K., Tough, S., Edwards, N., et al. (2011) Aboriginal Children and Their Caregivers Living with Low Income: Outcomes from a Two-Generation Preschool Program. Journal of Child and Family Studies, 20(3). 311-319.

Bichay-Awadalla, K., Qi, C. H., Bulotsky-Shearer, R. J., et al. (2020) Bidirectional Relationship between Language Skills and Behavior Problems in Preschool Children from Low-Income Families. Journal of Emotional and Behavioral Disorders, 28(2). 114-29.

Bierman, K. L., Heinrichs, B. S., Welsh, J. A., et al. (2017) Enriching Preschool Classrooms and Home Visits with Evidence-Based Programming: Sustained Benefits for Low-Income Children. Journal of Child Psychology and Psychiatry, 58(2). 129-38.

Brown, E. D., Sax, K. L. (2013) Arts Enrichment and Preschool Emotions for Low-Income Children at Risk. Early Childhood Research Quarterly, 28(2). 337-347.

Bulotsky-Shearer, R. J., Bell, E. R., Romero, S. L., et al. (2012) Preschool Interactive Peer Play Mediates Problem Behavior and Learning for Low-Income Children. Journal of Applied Developmental Psychology, 33(1). 53-66.

Burchinal, M., Vandergrift, N., Pianta, R. et al. (2010) Threshold Analysis of Association between Child Care Quality and Child Outcomes for Low-Income Children in Pre-Kindergarten Programs. Early Childhood Research Quarterly, 25(2). 166-177.

Chen, J. J. & de Groot Kim, S. (2014) The Quality of Teachers' Interactive Conversations with Preschool Children from Low-Income Families during Small-Group and Large-Group Activities. Early Years: An International Journal of Research and Development, 34(3). 271-89.

Cooper, C. E. (2010) Family Poverty, School-Based Parental Involvement, and Policy-Focused Protective Factors in Kindergarten. Early Childhood Research Quarterly, 25(4). 480-93.

Crosby, D. A., Dowsett, C. J., Gennetian, L. A., et al. (2010) A Tale of Two Methods: Comparing Regression and Instrumental Variables Estimates of the Effects of Preschool Child Care Type on the Subsequent Externalizing Behavior of Children in Low-Income Families. Developmental Psychology, 46(5). 1030-49.

Davis, A. N. & Qi, C. H. (2020) A Longitudinal Examination of Language Skills, Social Skills, and Behavior Problems of Preschool Children from Low-Income Families. Topics in Early Childhood Special Education, 40(3). 172-87.

de Haan, A., Elbers, E., Hoofs, H., et al. (2013) Targeted versus Mixed Preschools and Kindergartens: Effects of Class Composition and Teacher-Managed Activities on Disadvantaged Children's Emergent Academic Skills. School Effectiveness and School Improvement, 24(2). 177-95.

Dominguez, X., Vitiello, V. E., Fuccillo, J. M.,et al. (2011) The Role of Context in Preschool Learning: A Multilevel Examination of the Contribution of Context-Specific Problem Behaviors and Classroom Process Quality to Low-Income Children's Approaches to Learning. Journal of School Psychology, 49(2). 175-96.

Fantuzzo, J., Bulotsky-Shearer, R., McDermott, P. A., et al. (2007) Investigation of Dimensions of Social-Emotional Classroom Behavior and School Readiness for Low-Income Urban Preschool Children. School Psychology Review, 36(1). 44-63.

Fuligni, A. S., Howes, C., Huang, Y., et al. (2012) Activity Settings and Daily Routines in Preschool Classrooms: Diverse Experiences in Early Learning Settings for Low-Income Children. Early Childhood Research Quarterly, 27(2). 198-210.

Georges, A. (2009) Relation of Instruction and Poverty to Mathematics Achievement Gains during Kindergarten. Teachers College Record, 111(9). 2148-79.

Grace, R., Bowes, J., Elcombe, E. (2014) Child Participation and Family Engagement with Early Childhood Education and Care Services in Disadvantaged Australian Communities. International Journal of Early Childhood, 46(2). 271-99.

Heckman, J.J.（2013）Giving Kids a Fair Chance. Massachusetts Institute of Technology.（=2015　古草秀子訳『幼児教育の経済学』東洋経済新報社.）

平松知子（2016）「人生最初の６年間で育めるもの」秋田喜代美・小西祐馬・菅原ますみ『貧困と保育』かもがわ出版 54-71.

Janisse, H. C., Li, X., Bhavnagri, N., et al. (2018) A Longitudinal Study of the Effect of Computers on the Cognitive Development of Low-Income African American Preschool Children. Early Education and Development, 29(2). 229-45.

Johnson, A. D., Finch, J. E., Phillips, D. A. (2019) Associations between Publicly Funded Preschool and Low-Income Children's Kindergarten Readiness: The Moderating Role of Child Temperament. Developmental Psychology, 55(3). 623-37.

小西祐馬（2016）「乳幼児期の貧困と保育ー保育所の可能性を考えるー」秋田喜代美・小西祐馬・菅原ますみ『貧困と保育』かもがわ出版 pp.25-52.

厚生労働省（2019）「2019 年国民生活基礎調査の概 況 」https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/k-tyosa/k-tyosa19/index.html（20220921 検索）.

厚生労働省（2022）『令和 4 年版厚生労働白書』。https://www.mhlw.go.jp/stf/wp/hakusyo/kousei/21/index.html（20220921 検索）.

Lee, J. Sun., Ginsburg, H. P. (2007) Preschool Teachers' Beliefs about Appropriate Early Literacy and Mathematics Education for Low- and Middle-Socioeconomic Status Children. Early Education and Development, 18(1). 11-44.

Lee, P., Bierman, K. L. (2015) Classroom and Teacher Support in Kindergarten: Associations with the Behavioral and Academic Adjustment of Low-Income Students. Merrill-Palmer Quarterly: Journal of Developmental Psychology, 61(3), 383-412.

Mitchell, L., Meagher-Lundberg, P. (2017) Brokering to Support Participation of Disadvantaged Families in Early Childhood Education. British Educational Research Journal, 43(5). 952-68.

Mughal, M., Ginn, C. S., Perry, R. L., et al. (2016) Longitudinal Effects of a Two-Generation Preschool Programme on Receptive Language Skill in Low-Income Canadian Children to Age 10 Years. Early Child Development and Care, 186(8). 1316-1327.

内閣府（2014）『平成 26 年版子ども・若者白書（全体版）』https://www8.cao.go.jp/youth/white-paper/h26honpen/index.html（20220921 検索）.

内閣府（2019）「子供の貧困対策に関する大綱（令和元年 11 月 29 日閣議決定）」https://www8.cao.go.jp/kodomonohinkon/index.html（20220921 検索）.

中村強士（2015）「保育所保護者における貧困と養育態度―名古屋市保育所保護者への生活実態調査から―」『日本福祉大学社会福祉論集』133，17-27.

中谷奈津子・木曽陽子・鶴宏史他（2022）保育所等における生活困難家庭に対する組織的支援（３）―子どもに対する積極的支援―」『 日本保育学会第 75 回大会発表論文集』（聖徳大学，オンライン開催），K77-K78.

OECD（2021）OECD FAMILY DATABASE，https://www.oecd.org/els/family/database.htm（20220921 検索）.

OECD（2006）Starting StrongII：Early Childhood Education and Care.（= 2011 星三和子・首藤美香子・大和洋子他訳『OECD 保育白書―人生の始まりこそ力強く：乳幼児期の教育とケア（ECEC）の国際比較』明石書店.）

OECD（2021）Starting Strong VI：Supporting Meaningful Interactions in Early Childhood Education and Care.

Pagani, L. S., Jalbert, J., Girard, A.（2006）Does Preschool Enrichment of Precursors to Arithmetic Influence Intuitive Knowledge of Number in Low Income Children?. Early Childhood Education Journal，34(2). 133-47.

Pearman II, F. A. (2020) The Moderating Effect of Neighborhood Poverty on Preschool Effectiveness: Evidence from the Tennessee Voluntary Prekindergarten Experiment. American Educational Research Journal, 57(3). 1323-58.

Qi, C. H., Zieher, A., Lee Van Horn, M., et al. (2020) Language Skills, Behaviour Problems, and Classroom Emotional Support among Preschool Children from Low-Income Families. Early Child Development and Care, 190(14). 2278-91.

Rao, N. (2010) Preschool Quality and the Development of Children from Economically Disadvantaged Families in India. Early Education and Development, 21(2). 167-86.

Sabol, T. J., Bohlmann, N. L., Downer, J. T. (2018) Low-Income Ethnically Diverse Children's Engagement as a Predictor of School Readiness above Preschool Classroom Quality. Child Development, 89(2). 556-77.

Schroeder, J. (2007) Full-Day Kindergarten Offsets Negative Effects of Poverty on State Tests. European Early Childhood Education Research Journal, 15(3). 427-40.

Smith, S. C. (2012) Cultural Relay in Early Childhood Education: Methods of Teaching School Behavior to Low-Income Children. Urban Review: Issues and Ideas in Public Education, 44(5). 571-89.

Susman-Stillman, A., Englund, M. M., Storm, K. J., et al. (2018) Understanding Barriers and Solutions Affecting Preschool Attendance in Low-Income Families. Journal of Education for Students Placed at Risk, 23(1･2). 170-87.

Thomas, N., Colin, C., Leybaert, J. (2020) Interactive

Reading to Improve Language and Emergent Literacy Skills of Preschool Children from Low Socioeconomic and Language-Minority Backgrounds. Early Childhood Education Journal, 48(5). 549-61.

鶴宏史（2021）「生活困難家庭を早期に発見する視点」中谷奈津子・鶴宏史・関川芳孝編著『保育所等の子ども家庭支援の実態と展望』中央法規，161-170.

Winsler, A., Tran, H., Hartman, S. C. et al. (2008) School Readiness Gains Made by Ethnically Diverse Children in Poverty Attending Center-Based Childcare and Public School Pre-Kindergarten Programs. Early Childhood Research Quarterly, 23(3).314-30.

Wilson, A. J., Dehaene, S., Dubois, O. et al. (2009) Effects of an Adaptive Game Intervention on Accessing Number Sense in Low-Socioeconomic-Status Kindergarten Children. Mind, Brain, and Education, 3(4). 224-35.

Yen, S., Lee, A. Y. (2019) Jumpstart Program Efficacy: The Impact of Early Childhood Education Advancement Initiatives on Low-Income Preschool Children's Literacy, Agency, and Social Relations. Cogent Education, 6(1). 1-16.

【付記】

本研究は，JSPS 科研費 19H01651 及び 20K02516 を受けたものである。